

小学生の学力低下がおきてくる現実

桑名紀子

今、学校は…

昨年、ある新聞が新潟県各地の高校入試の平均値を公表し、県北地域が県内で一番平均点が低い、と指摘しています。

そして、その県北地域の中でも××地区が低い……というふうには、わかる状況になっています。

「学力」が低いということは、以前から問題にされ、各市町村単位に「学力向上対策委員会」が設けられていました。

これまで通りの迫り方でよいのだろうか？

子どもたちの状況がひところよりも大きく変化・変動しています。私は、「これまでの延長線上では解決

しないのでは……」と強く感じます。

私の学校では、学力向上対策の一つとして「朝学習」に取り組んでいます。

子どもたちは、登校したてのポオーッとした頭で、受け持ちの教師が教室に来るまで、プリントやドリルを学習するのです。

朝、授業が始まるまでの時間は、ウォーミングアップもかねた大切な、目覚め、立ち上がるまでのひとときです。

私の学校では「朝学習」ですが、「家庭学習」をメインにしている学校もあります。

各学年に相応した家庭学習の時間帯を設定するというものです。たとえば、六年生なら60分、五年生は50

分、四年生は40分……というように。

それを伝え聞いた別の小学校では、「それでは、うちはプラス10分で行こう」というふうになります。10分を加算するのです。六年生だったら、⑥+①で70分、五年生は60分、となるわけです。

こうした「学力向上」対策の方法が、広く実施されているのです。

授業こそ本番、とわかっていても、それでは追いつけないという形で――。

そして今、私の学校をふくむ、周辺の東北地域の学校にも「いじめ・不登校」や「学級崩壊」、「児童虐待」などの深刻な問題が、例外なしに起きています。

授業についていけない子ども、授業がなり立たない学級、……そういう事態に直面し、その解決がもめられるのもしばしばです。一律に「時間外」学習へと子どもたちを追い込んでいく。果たしてこれが「学力向上」につながるのか？ 子どもの状況を身近にとらえている教師に根本的見直しへの願いが、日ごとに強まらざるをえません。

実際、学校で子どもたちは、どんな一日を過ごしているのでしょうか。

時間に追われる子ども

三学期に入ったある日の例ですが、五校時を終えて帰る一年生たちは、ついに自由に遊べる時間が一分間もありませんでした。

全校的視野から自分の受け持つ学級の動きを観察。ああ、時間に追い立てられる子どもたちの姿……の印象が、私の心にやきつきまりました。なわとび大会の直前という時期ではあったけれども、総じて、子どもたちは忙しい学校生活を過ごしています。

朝、登校する子どもたち。

六年生たちが、寒い玄関であいさつ運動をしています。

そこをなんとか通過すると、教室に入って学習の準備。この時間帯で、係の仕事をすると子ども、あるいは飼っている生き物の世話をする学級が多い。

ニワトリやうさぎ、ハムスター、魚類など、ほとんどの学級が何か飼っていて、その世話が終わると、朝学習の開始です。

そのあとで、子どもたちは午前の四校時と午後二校時をこなしました。

午前の二〇分間の休憩時間は、班ごとの長なわ練習があり、昼休みの三〇分間も、タテ割り班のなわとび練習でした。

しかも、私の学校ではチャイムがありませんから、一年生でも時計を見ながら（遅れないように）行動していました。チャイムなしの学校がふえているようです。

学力、学力！

息つくひまもない、現場教師たち。

新年度の「学力向上推進計画書」が打ちだされました。

子どもたちの現状に目をすえながら、その「推進対策」の主な方向を見つめてみます。

「教育は一体どうなってるのよ」

「私たちはどう教育すればいいの」

いま、少なくとも現場教師たちの心の中に不安と戸惑いが生じているのは、事実です。

二つの流れのぶつかり。

あとで触れるもう一つの流れとのかかわりで、矛盾が起きているからです。

やや詳しく記します。

「学力テスト」結果が、各校学力向上推進委員によって集計され、一覧表になって流されてきました。そこに添付された「学力向上推進計画書」——これは、地域ごとに同対策委員会が作成する仕組みですが、下越教育事務所の指導主事らが直接指導に入っている内容です。

これには『各校実態分析と問題点・考察』があり、次のようになっています。

「……算数の学力向上を研究主題として四年間取り組んだ学校では、学力の向上が顕著であった」

今、切実にもとめられているのは、子どもたちのありのままの実態に即した具体的な対策であり、それなら「やれる」という方法です。

たしかに、算数にしばって四年間も集中すれば学力のアップは当然といえるでしょう。そうできるならば、です。私の学校を例にとれば、文部省指定の「人権教育研究」校としての発表を間近にひかえています。全校をあげて取り組んでいるまっさい中です。多くの学校が、大なり小なりの当面する課題をかかえています。先の「問題点・考察」は、次のように続いています。

「授業や朝学習などで意図的に時間を設定し、繰り返し指導した内容は定着が見られるが、応用的な内容や少しでも難しい問題だと解くことのできない子どもが多い。学習内容を定着させるための家庭学習の時間が不足している……」つまり、朝学習か家庭学習か、ではなく、どっちもやれということでしょうか。これからの『課題』について次のように記してあります。

「……既習の学習内容の定着を徹底するための全校体制での取り組みをいかに進めるか」この見地から『課題解決への対策』として次のように打ち出されています。

「第一に、家庭学習の取り組みを強化」

「繰り返し習熟させ」

「宿題の形で習熟を徹底……」

「実施した内容が生かす（生かされる？）評価の工夫をする」

「毎日、算数・数学をやる」

などとなっています。

さらに「目標値」が設定され、小・中学校の「各領域の達成率」に言及しています。

「……各校・全領域で今年度分析数値により、全国達成率（学力偏差値）を上げ、全体として小・中学校の、各領域の達成率を上げる」

その一方で、たとえばこの夏休み後に流されてきた文書には「いじめ・不登校の解消に向け小・中の一層の連携を」（下越教育事務所）があり、そこでは、「全職員が『把握していないいじめがあるのではないか』という意識を持ち続け、『いじめ防止学習プログラム』の一層の活用を図りながら、いじめの撲滅に努めていただきたい……いじめの発生状況は」「今後に向けて」など。

あれもこれも、という以前に、あれとこれの密接不可分の相互関係を明らかにしてほしいです。授業についていけない子どもがいると、そのまま「平均値」は低下する仕組みになっているではありませんか！

「総合学習」との対応は？

ところで、来年度から『新指導要領』にもとづく、新たな教育課程が始まります。

今回の「改訂」のメインは「総合的な学習の時間」が、大幅に導入されたことです。

私の周辺の教師たちは、ほとんど全部とっていいほど、前述の不安を声に出しています。

「総合的な学習で、いわゆる『学力』がつくとは思えない」と。それは実感としての確信に近いものです。来春から「学校五日制」が実施されます。これまでの正規授業の時間が減少します。その状態の中で、年間一〇五時間ていどの新たな「総合的な学習の時間」を差しはさむことになります。

その「総合的な学習」時間は、二つの意味で教師たちの困惑をよび起こしています。というのは、それが「教科の学習ではない」のです。「特活」でもなく、「道徳」でもないとのことです。

新たなカリキュラムの作成と実践それじたいは、これからの新しい模索です。と同時に、従来の「学力向上推進計画」とのかかわりを、どうするのか？

土・日の学校休業と共に、教科ではないとされる「総合学習」時間の新設——。このままでは、時間外の学習へと追い込まれるのです。

辞めるものか

「……もうだめ。命にかえられないわ」と途中で学

校を辞めてしまう教師が、あとをたちません。

子どもたちをめぐる、新たな事態（社会問題）に直面する中で、私のような年代の教師たちが、いちばん参っています。これまでの豊富な経験が、あまり役立たないなあって感じ。それに加えて、もう体力的についていけない——。

この春先も、「ね！ さいこまで勤めようよ」と励まし合っていた友だち数人が、辞める決心をしています。

子どもたちの「荒れ」や「キレ」の前では為す術もない、というのがほんとうのところでは、それに職場の「忙しさ」。これも例外はありません。

さびしそうに、「命にかえられない」とつぶやいた友だち。それが私の耳からはなれないのです。

先日、この春退職した友人と電話でやりとりをしました。受話器の向こうから聴こえる声が、すごく！ 弾んでいた。はぎれがよかった。

「わたし、今、パソコンの講習に通っているのよ。

もう二〇時間もやったかな、ちょっとした『おたより』くらいは作れるようになってサ……」

そのとき、私は心の中でさげんでいました。

“あんた 先見の明があったわね”

だが、私は辞められない。来年の学力テストでもM子ちゃんを、泣かすわけにはいかない。「学力」というカベ。そこに挑んでいく私のリターン・マッチがあり、今年はずっと辞めるわけにはいかない。

昨年一年生に入学してきた子どもたち。

その中に、M子ちゃんがありました。身長は一一〇センチ。体重一六キログラム。言葉の発達が遅れていて、私はお家の方に「だいじょうぶですよ」と請け負って見たものの、ほんとうは心配でした。

一年近くたち、M子ちゃんはひらがなの読み書きができ、絵本が読めて作文も書けるようになりました。

そして迎えた一月末の「教研式学力検査」。……国語は22問で、解答の数は65。算数も25問で解答数64。つい一年近く前まで名前の読み書きがやっと、という子どもたちが、たった四〇分間でこのボー大な問題にたちむかったのです。

M子ちゃんは、ただ自分の名前をかきこんただけでした。十六ページにも及ぶ問題集を前にして、ジッとすわっていました。書けるこたえは一つもなかったのです。

でも、M子ちゃんはすばらしい子でした。走る姿がとってもよいのです。それに、連日のなわとび練習の中で、彼女は「連続二五〇回跳び」の学級のトップに立ちました。

彼女は日記にかいています。

「Mはいとんだよ、にひやくとんだよ、……せんせいうれしい、Mうれしい」

私は、彼女が文字を習得するまでに何年もかかるだろうと思っていました。目がまわるほどうれしくて、ただただ「すごいね」とほめました。促音や「てにをは」はまだ正しくかけませんでした。学級の子どもたちには読んでやるようにしていました。「おもしろいね」と笑って聞いてくれ、「M子ちゃんはいしたもんだ」と感心する矢先の、無残なできごとだったのです。

冬の足音が近づくと頃——。

研究発表の日も間近に迫りました。

帰宅するのは、夜九時あるいはそれ以後という連日です。動きを止めたら倒れてしまうかもしれないなあ……。辞めてなるものか、と自分を励ましている私です。

(くわなのりこ・関川村立川北小学校)